

キャスト

丹下左膳 (44才)	小松篤	村人	オヨネ (マドンナ)	(30才)	菊池由佳
お藤 (35才)	宮澤裕美	文吉 (長男)	(23才)	降矢美保	
お久 (25才)	大久保由紀子	与作 (次男)	(22才)	柳沢しの	
		勘太 (三男)	(21才)	中村結希	
ちよび安 (8才)	池田未来	虎之介 (甲賀の忍び)	笠原隆晃		
お美夜 (8才)	伊藤祥子	小太郎 (甲賀の忍び)	佐々木大輔		
弥平 (70才)	進藤正典				

柳生源三郎 (44才)	小林千冬	蒲生泰軒 (徳川の刺客)	(60才)	竹下真
世之介 (侍)	ウイリイ	春道 (侍)	エキストラ	
右近 (侍)	田中裕子	作造 (侍)	エキストラ	
高大之進 (50才)	有賀慎之助	ちんどん屋	THEちんどん	(永井)
		八子 (犬)	原田奨	

ゲスト

MYプロジェクト	ダンス	原作	林 不忘	舞台監督	岩崎佳弘
龍神会	龍神の舞い	脚色	小林千冬	照明	RAYFIX 志村隆良
千代丸 (芸者さん)	三味線演奏	演出	山岡泰一郎	音響	Mプランニング 真島邦明
ミニマックス (市川さつき)	作曲・演奏	制作	小林里子		飯島祐介
			垣内博文	プロモーション	泰一郎&千冬

開演（幕まえ）

ちんどん屋

♪チンチンドンンドンチンチンドン

さてさて、ご来場の皆さま、これより演じますのは娯楽時代活劇「姓は丹下、名は左膳」でおなじみ丹下左膳でございます。片目片腕のこのヤセ浪人。名刀「濡れ燕」を抜けばめっぽう強い。誰も手出しができません。おまけに大の女好きとあって、話題の尽きないのがこの丹下の旦那でございます。

時は江戸時代の終わりあたり、ところは諏訪湖のほとり中山道は下諏訪宿。普段はのどかな宿場ですが、本陣にどこぞの殿様が宿泊なさるとあれば、上を下への大騒ぎ。今日のお泊りは「伊賀の暴れん坊」で日本中にひびきわたったあの柳生源三郎でありました。このお方も柳生一刀流の名人。とつても腕っぷしが強いんです。そこに、たまたま居合わせた丹下左膳。この2人。衝突でもしなければいいのですが。

それではお待たせいたしました。全4幕「丹下左膳」をごゆっくりお楽しみください。

♪チンチンドンンドンチンチンドン

第一幕 下諏訪宿

―幕が上がる―

賑やかな下諏訪宿。今日は伊賀の若殿がご宿泊しているというので、大騒ぎになっている。侍や旅人、宿の主人や女中、町人、村人らが入り乱れている。(群舞)

そこに逃げ込む2人の子供ちよび安(8才)お美夜(8才)。ちよび安は壺を片手に抱き、お美夜の手をしっかりと握って追手から逃れている。追いかけて来る侍(2人)必至な形相。

世之介

こら！待て！

右近

すばしっこい小僧じゃ。

世之介

何としても捕まえる。

右近

心得ておる。

世之介

あそこだ。

右近

逃がさぬ。待て！

そこに三味線を持ったお藤。ちよとど通りかかるとちよび安、お藤の背中に隠れる。

お藤

何んだい。真っ昼間っから鬼ごっこかい。

ちよび安

おばちゃん助けて！

お藤

・・・(見た目に不機嫌)

ちよび安

おばちゃん、ねえ、助けておくれよ。

お藤

うるさいね。あたしや子どもが嫌いなんだよ。

ちよび安

おば・・・綺麗なお姉さん。助けておくれよ。

お藤

おや、ちったあかわいいところがあるんだね。

世之介

こら、そんなことはどうでもよい。

お藤

なんだい。いい大人が寄ってたかって。相手はまだ小さな子供じゃないか！

侍たち、お藤の威圧感に押されて。

世之介

・・・うっ、かばいだてをいたすか。

右近

さあ、その壺を返してもらおう。

ちよび安

いやだよ。これはおいらが貰ったんだ。

世之介

貰っただと。宿にこっそり忍び込み、盗んだのではないか。

お藤

えっ！

ちよび安

ちがわい。

お美夜

えええええん。

ちよび安

お美夜ちゃん、泣くんじゃねえよ。

そこに弥平が現れる。

弥平

おお、安坊とお美夜ちゃんじゃねえか。

ちよび安

じいちゃん。

弥平

お侍さん、この2人が何か？

右近

壺を盗みおった。

弥平

そっ、そんなバカな。

ちよび安

お侍さんに貰ったんだ。

お美夜

そっよ。

弥平

貰った？

お藤

おや、中で金魚が泳いでいるよ。

世之介

何！金魚だと。

右近

なんてことを。小僧、その壺を何と心得る。

ちよび安

金魚すくいで、一匹つかまえたんだ。でも、入れ物がなくて……。

お美夜

そしたらお侍さんが来てこの壺をくれたの。

世之介

うそをつけ、そんなバカな話しがあるものか。

源三郎

その小僧が言ってることは本当だよ。

右近

えっ？

お美夜

あっ、金魚鉢のおじちゃんだ。

侍たちの主人。柳生一刀流の使い手、柳生源三郎がやってきた。

世之介

これは源三郎さま。今、何と仰せられた。

源三郎 俺がやったんだよ。なあ。

ちよび安とお美夜 うん。

お藤 ほら、ごらんよ。盗んだなんて人聞きの悪い。

右近 そうでしたか。

世之介 しかし、源三郎さま。これは兄柳生対馬守様よりの結婚祝いの品。

お藤 結婚？

源三郎 まったく参っちまうよな。まだ、見たこともねえ、道場主の一人娘と結婚しなきゃならねえ。

俺はこれからその女が待つ江戸に行く所だ。

この壺は、対馬守様からのたった一つのお祝い物。

この壺一つを貰ったのか。

・・・まったく、無念。

そう言うな世之介。兄上が決めた婚儀だ。逆らえねえよ。

源三郎、壺をのぞいて。

源三郎 ほら、金魚がうれしそうに泳いでらあ。

源三郎、自分と重ね合わせて金魚を見ている。

ちよび安 ありがとうおじちゃん。

右近

源三郎

ちよび安

源三郎

これ！このお方をどなたと心得る。

いいじゃねえか右近。小僧は俺の友達だ。なっ。

うん。友達だ。じゃあねえ。金魚鉢のおじちゃん。

あははは、じゃあねえ。

弥平、ちよび安、お美夜、お藤。じゃあねと手を振る源三郎に手を振りながら去る。

世之介・右近

じゃあねえ……。

笑顔の源三郎。満足げだ。

世之介

源三郎

世之介

源三郎

右近

源三郎

世之介

源三郎

しかし、源三郎さま。どうして急に。

さっき手紙が届いたんだ。兄上からだ。

対馬守さまが何と。

あの壺を返せと言ってきた。

なんですと。

あとで必ず、もっといい物を送るから使いの者に渡させと。

バカにするのもいい加減にしてほしいですな。

兄上は人は悪くねえんだがなあ。とにかくケチなんだよ。それに数年前に好いた侍女が宿下
がりの間に病死して以来、偏屈が増えてまだ嫁も取らん。何を考えているのか。

世之介
源三郎
世之介
源三郎
世之介

話によると、その女の宿下がりには子供をみごもったからだそうでございます。何！それでは、その女は、兄上の子供を産んで死んだのか？ たぶん、それで対馬守さまは、内密にその子を探しているとのこと。・・・そんなもん、見つかるもんか。まったくでございます。

左膳

そこに丹下左膳。片目片腕、腰に名刀「濡れ燕」をさし、着物の裾からチラチラと女ものの派手な模様が見え隠れする。肩に「升徳利」をさげ、眠そうにやってくる。なんだ、今日はやけにうるせえなあ。

左膳

丹下左膳。宿にかかれた「柳生源三郎御宿」とかかれた大きな宿札を見て。柳生源三郎？あの「伊賀の暴れん坊」がここに来ているのか。

左膳、その宿札の前に立つ。一瞬、腰元が光ったと思うと宿札はすっぱりと真っ二つ。刀もすでに腰に納められ、あっという間の出来事。

世之介・右近

ああああっ！（落ちた看板に走り寄る）

世之介
右近

きさま、何をする！
無礼無理もの！

世之介・右近。左膳を取り囲むと刀を抜く。

左膳

ふっ、何かようかい。

そこに、源三郎が現れて、宿札の切り口を見る。

世之介

さきほどの小僧といい、今度は無礼なヤセ浪人か。

右近

まったくなんという日だ。

源三郎

やめろ！

世之介

しかし……。

右近

こんなことをされては。

源三郎

お前達のかなう相手ではない。

源三郎、左膳に近づいて。

源三郎

俺は柳生源三郎だ。お主、名を何と申す。

左膳

俺か？……姓は丹下、名は左膳。

源三郎

左膳

源三郎

右近・世之介

どうしてこのようなことをした。

さあな。ただ俺は権力ってやつが大嫌いだな。

ははは、実は俺もだ。帰るぞ。

えっ、はっはい。

源三郎行ってしまふ。世之介、右近その後を追う。

左膳

柳生源三郎。おもしれえヤツだ。

プロモーション。(アニメ)

プロモーションが終わると弥平の荷車が通る。荷車の上で、ちよび安とお美夜が楽しそうに遊んでいる。甲賀の忍びの者2人。どうやら、ちよび安の持っている壺によつがあるらしい。

小太郎

あにき、あの壺ですよ。

虎之介

おお、あの壺に間違いねえ。

小太郎

でも、なんで百万両の壺をあのがキが持って行ったんでしょう。

虎之介

あの壺の秘密が分かったのが3日前。まだ、源三郎には知らせていないんだろう。

小太郎

何も知らずに百万両の壺をあのがキにあげちまったんだ。

虎之介

はははは、トラベル・チャアンス！

小太郎

あの壺を猫ばばですね。

虎之介

違う！もともとあの壺は「甲賀の里」にあったものだ。それを柳生が奪ったんだ。

小太郎

許せませんね。絶対に、取り戻しましょう。

虎之介

ああ、必ず。甲賀の忍びの者を集めたか。

小太郎

はい。陰に控えております。

虎之介

その腕前を見せてみる。相手は柳生だ。さうとう手ごわいぞ。

小太郎

ただいまお見せいたしましたしょう。おい！甲賀の衆。

甲賀衆、遠くで「おう」と返事。どこからともなく飛びだしてきて、その腕前を披露。

(ダンスで表現) MYプロジェクト

虎之介

しかし、ちっちゃな甲賀衆だな。

小太郎

気持ちは大人です。

虎之介

なるほど。

全員

がああはははははは。

虎之介

よし、百万両は俺たちのものだ。行くぞ。

全員

はっ！

甲賀の忍び、弥平とちよび安の後を追って去る。

お美夜と村の三兄弟

―暗転幕下がる―

夕暮れ。太鼓の音が遠くから聞えて来る。それをノンビリと眺めている村の三兄弟。ドンドンドン、ドンドン。

みんなよくやるようなあ。

隣の五助も太鼓を始めたらしいぞ。

気合いが入っているよな。

祭が近づいて一生懸命なんだよ。

祭は見るのが一番。

そう。

とても俺たちにできそうもねえし。

ああ。

そこにオヨネ。ハチ（犬）と一緒にやってくる。

オヨネ
三人
あら、あなたたち何やってんの？みんなと一緒に練習しなくていいのかい？
オヨネちゃん！

オヨネ

あんた達も男でしょ。みんなで練習すれば。

文吉

やりたい人がやっていればいいんだよ。

与作

そうそう、俺たちには見るのが専門だから。

勘太

見るだけなら疲れないし。

オヨネ

あんた達って、幸せよねえ。

三人

そう。(ニコニコ)

オヨネ

褒めてないから！

三人

えっ！

文吉

オヨネちゃん。祭の夜に、俺、大事な話があるんだけど。

与作

俺も。

勘太

俺も。

オヨネ

偶然、あたしもあるの。しかも、今。

勘太

えっ！何 ♡♡♡♡

オヨネ

文吉！私にストーカーするの止めて！

文吉

しまった。気づかれてたのか！

与作

(文吉に) 人間性を疑うよ。

オヨネ

与作！あたしの家の前の掲示板にいやらしい書き込みするの止めて。

与作

ドキ！

勘太

(与作に) モラルのかけらもないな。

オヨネ

勘太！庭に干して置いた私の肌襦袢返して。

勘太

ごめん。つい。

文吉・与作

(勘太に) 最低だなお前!

オヨネ

みんな最低よ。ハチ!

ハチ

ガオオー! (兄弟たちハチに襲われる。「ワンワンワン!」「たすけて〜え!」)

ハチ

ガブリ!ガブリ!ガブリ!

三人

わあああつ。・・・ピクピクピク。

オヨネ、ハチの報復を見届けると。

オヨネ

まったく、兄弟そろって役立たずなんだから。(去る)

文吉

役立たずだってよ。

与作

全身にカミナリを受けた気分だ。

勘太

ああ、俺はもう腰砕けだよ。

三人

オヨネ、最高。

―暗転幕上がる―

本陣内部。源三郎と柳生但馬守（源之助の兄）の家臣、高大之進。源之助に持たせた壺が「百万両の壺」と知り、あわてて取り返しに来た。

源三郎 なっ、何！あの壺が百万両。

大之進 はっ、ですから、源三郎さまにお預けした壺が「こけ猿の壺」なのです。
源三郎 誰がそんなことを言い出したんだ。

大之進 「風宗匠に内緒の話があると呼び出されて、何かと思えば・・・何と、柳生家重代の家宝の一つ、「こけ猿の壺」に百万両の黄金の隠し場所が塗り込まれてであると申されました。

源三郎 なぜ今までだまっていた。

大之進 藩が本気で貧乏になるまで黙っていたそうです。

源三郎 ・・・・そうだったのか。

大之進 どうかなさいましたか。

源三郎 いや、何でもない。

大之進 はは。それではさっそく「こけ猿の壺」を。

源三郎 えっ？

大之進 えっ、ではなく壺をこちらに。

源三郎 なぜ。

大之進 ですから、壺を返していただけないかと。

源三郎 兄上がそう言ったのか？

大之進 当然です。

今度は源三郎が観念して、大之進に耳打ち。

ええええええ！くれた。

ああ。

くれたって、「こけ猿の壺」をですか！

どこかの小僧にあげちゃった。

なんですと！

百万両の価値のある壺とは知らなんだ。

事は一刻を争います。

小僧の顔は覚えておるが・・・どこにおるのやら。もしかしたら捨てちゃったかも。

どうすんですか！

困ったね。

のんきなこと言ってる場合じゃないでしょう。お触れを出して、諏訪中の壺という壺をかき

集めましょう。

そんなことができるのか。

やるんですよ。百万両ですよ。

そうだな。

源三郎さまは、その小僧を探してください。

わかった。

大之進
源三郎
大之進
源三郎
大之進
源三郎
大之進
源三郎
大之進
源三郎
大之進
源三郎

弥平がちよび安とお美夜を荷車に乗せてやってくる。そこに、丹下左膳。傍らの隅でお藤とお久が一本の御触書を見ながら話しをしている。

弥平 どうも、左膳の旦那。

左膳 よう坊ず、お美夜ちゃん、元気かい。

ちよび安 片目のおじちゃん見て。

左膳 おっ、金魚か。

ちよび安 お美夜ちゃんに捕ってやったんだ。

左膳 そうか、でも気をつけな。あんまり覗くとおじさんみたいにパツクリ目玉食われるぞ。

ちよび安とお美夜 えっっ？

泣きそうな2人。

弥平 旦那、子供たちをからかっちゃいけませんぜ。

ちよび安 食べられちゃったの？ねえ、それ、食べられちゃったの。

左膳 いや、そうか。どれ、あっ、これは大丈夫だ。赤い金魚だろ。おじさんのは黒だった。大丈夫だよ。

ちよび安とお美夜。金魚を見て震えてる。

左膳
弥平
左膳

いや、すまんすまん。

後でちゃんと話しておきますから。
頼む。

一本の御触書。お藤が左膳に声をかける。

お藤

あんた、ちょっと来てご覧よ。

左膳

どうしたお藤。何かあったのか？

お藤

この御触書だよ。

お久

柳生藩が壺を集めているそうなんですよ。

左膳

壺？

お藤

どんな壺でも一両で買ってくれるって。

左膳

へえ、柳生のやつら、いったい何をたくらんでいるんだ。

そこに甲賀の2人。

小太郎

とうとう、あの壺が百万両の壺だってわかったみたいですね。

虎之介

一両を餌にして、諏訪中の壺をかき集めるつもりだ。

小太郎

へへへ、後の祭だ。あの壺がどこにあるのか知ってるのは我々だけです。

虎之介
小太郎
虎之介
虎之介
虎之介
小太郎

それじゃあ、そろそろあの壺を取り戻すとするか。
どうやるんですか？

ガキに泣かれてはかなわん、ガラスの金魚鉢を買って交換してもらうんだ。
そうか、透明な方が金魚が良く見える。子供なら飛びつきますね。さすが、兄貴だ。
行くぞ。

はい！

虎之介・小太郎。ちよび安たちの後をつけて行く。左膳、ふらっと歩きだして。

お藤
左膳
お藤
お藤
お藤

ちよっと、どこに行くつもりだい。
酒だ。酒を買って来るんだよ。

そんなこと言って、どこかで浮気してるんじゃないだろうね。

そんなことするかい。

どうだか。

左膳、御触書を眺める。そこに源三郎。世之介と一緒にやってくる。怒りながらハケて行く
お藤とお久にすれ違う。源三郎とお久、振り返って見つめ合う。

お久
源三郎

こんにちは。

ああ、こんにちは。

源三郎、フラフラとお久に近づいて。

世之介
源三郎
世之介
源三郎さま。そんなことしている場合じゃありませんよ。早く、あの小僧を探さなくては。わかつていいる。間違はなくこの辺の子供だ。そのうち見つかる。
・・・はあ。源三郎さまの女好きにも困ったものだ。

お久、行ってしまふ。なごり惜しそうに見つめる源三郎。御触書を見ていた左膳。

左膳
壺が一個二両か。バカバカしい。

左膳、源三郎と目が合う。

源三郎
よう、またあったな。

左膳
柳生の旦那か。あんた、何の為に壺を集めてるんだい。

源三郎
おまえには関係のないことだ。

左膳と源三郎、思い切り睨みあう。

源三郎
お主。少しは使えるようだな。

左膳
源三郎

試してみるかい。
ふんっ、望むところ。

2人は喧嘩っ早いらしい。すでに抜き身の構えに入っている。世之介、慌ててそれを制して。

世之介

源三郎さま、目があっただけで何をムキになっているんですか。壺ですよ壺。

源三郎

ああ、そうだったな。

左膳

ちえ。

源三郎

ちえ。

左膳、何事もなかったように行ってしまっ。

源三郎

あの侍。丹下左膳とか言ったな。

世之介

はあ。百姓町人にはめっぽつやさしく人気もありますが、武士に恨みを持っているのか、あ

あして喧嘩をふっかけては楽しんでるようす。

源三郎

なるほど、また、どこかで逢うであろう。

源三郎、2人の侍と共に立ち去る。鐘の音。

—暗転幕下がる—

ちよび安

さあ、お立ちあいの衆！ 孝行をしたい時分に親はなし、石に蒲団は着せられずとか……。

源三郎、遠くでちよび安を見付けると。

源三郎

世之介。諏訪の町は広い。別れて探そう。うん、それがいい。

世之介

えっ、でも……。

源三郎

いいからいいから。

世之介

わかりました。

しぶしぶ今来た道をもどって行く世之介。

世之介

大之進さまが壺を自分のものにしてしようとしてるのも知らずに。のんきなもんだ。

源三郎、ちよび安の方へと向かう。

ちよび安

昔からいろいろ言ってるが、おいらなんざア自慢じゃアねえが、生まれ落ちるっから、親の面ッてえものをおがんだことがねえんだ。おいらのふた親は、伊賀の国柳生の者だとか、手がかりがねえんだが。もしお立ちあいの中に、心あたりのある人があったら、ちよいと知らせておくんせエ。さア、夏のことだ、前口上まへくちがしが長えと、芸が腐らあ。ハッ、お美夜太夫！

お美夜

あいよ。

そばに立っているお美夜ちゃんが、ニッコリ答える。

文吉

ようよう！ 夫婦夫婦ひな形！

与作

待ってました！

勘太

日本一！

いろんな声がかかる。源三郎も見物人の仲間に入る。

ちよび安の唄

「♪むこうの辻のお地藏さん」

で、お美夜ちゃんは首をかしげて、かわいい仕草をしながら、左の手で右の杖たもとをだき、右の人さし指でむこうを指さす仕草をする。

ちよび安の唄

「♪ちよいと聞くから」

で、その手を返して、お地藏さんの肩をたたく手つき。

ちよび安の唄

「♪教えておくれ」

のところは、胸に両手を合わせて、身をもむように、一心に頼むところを表わす。

ちよび安の唄

「♪よだれくり進上、お饅頭進上」

と、お美夜ちゃんは涎繰り（おもい花）を手に添えたり、お饅頭をこねたり、あんをつめたり、ふかしたりの仕草、なかなか忙しい。

ちよび安

「♪あたいの父ちゃんはどこへ行った ♪あたいのお母ちゃん・・・」

文吉

小僧め、唄いながら泣かないでやがら。

与作

親をそうって一心なんだ。

勘太

なけるねえ。

源三郎

へえ、なかなかうまいもんだ。

ちよび安の唄

「♪エエ、じれったいお地藏さん」

の唄声に合わせて、お美夜ちゃんは両の袂を振りまわし、さもじれっただそいな仕草。

ちよび安の唄

「♪石では口がきけないね」

で口に両手を重ねて、オヨヨヨヨ。いいぞいいぞの声。チョンと拍子木を打ち上げたちよび安。見物人の拍手。すすり泣きも聞える。

ちよび安

ヤイヤイツ！ 何をポカソとしてやがるんでエー！おいらもお美夜ちゃんも、おまんまをいただかずに踊ったり唄ったりしてるんじゃないやアねえや。さア、たんまりお鳥目を投げたり、投げたり！

と、ちよび安は投げ銭の催促。あっちからも、こっちからもバラバラッと小粒が飛ぶ。

お美夜

まア、ほんとうにありがとうございます。

ちよび安

一枚、二枚・・・」

と銭を数え落としていたが、立ちあがって見物人の方へ向かい。

ちよび安

オイ、これじゃア一日のかせぎに、ちよっと足りねえや。おう、そこにいるお侍さん、財布のひもを、ちっと、解いたらどんなもんだい。

名指された源三郎は、苦笑しながら、小銭を袖口から出して、ちよび安へ渡す。ドツと湧く

見物人。辻芸が終わると三々五々去って行く見物人。源三郎、傍らで見守るお久のところに
き声をかける。

―暗転幕上がる―

お藤が営む笹屋。お久はそこで働いているらしい。粗末な台とイスが数脚。

源三郎

お久

兄弟なのか。

源三郎

お久

いえ、そうじゃあないんです。あの、□のよくまわる男の子は、父も母もないとかで、それ
を探すために、ああやって辻芸を売って、あちこち歩いているんだそうですよ。
さっきじいさんと一緒にいたが。

弥平じいさんは、あの子を孫みたいに面倒みてるんですよ。

源三郎

お久

あの女の子は？

近所の子さあ。ああやってちよび安のお手伝いをしているんだよ。けなげだねえ。

源三郎

お久

まだ幼いのにたいしたもんだ。

二人の仲のいいことったら、どうです。あのまま大人になったら、夫婦夫婦にしてやりたいです
ね。

源三郎

ああ、まったくだ。

お久、改めて源三郎の存在に気がついて。

お久

あら、ごめんなさい。うちに御用ですか？

源三郎

ああ、用がある。さっき俺と目があっただろう。

お久

ええ。

源三郎

なぜ？

お久

えっ？

源三郎

なぜ目があったのだ？

お久

なぜって、ただ。

源三郎

なぜだか、わしが教えてやろうか？

お久

ええ。

源三郎

わしの男っぷりがよいからだろう？

お久

あらやだ。しょってるわね。でも、そうね確かに男前よ。

源三郎

そうだろう、そうだろう。はははは。

源三郎、イスにどかんと腰を降ろすとちよび安とお美夜に目がいく。

ちよび安

すまなかつたなあ、お美夜ちゃん。今日は朝から踊りつづけで、くたびれやしないかい？

お美夜

ううん、大丈夫。

ちよび安

足が痛くはねえかい？

お美夜

うん、ちよつとね。でも、たいしたことない。

ちよび安、源三郎に気がついて。

ちよび安

あハハハア、今お鳥目をめぐんでくれたお侍さん。やっぱり、金魚鉢のお侍さんだ。

源三郎

ああ、どうだ。金魚は元気かい？

ちよび安

ああ。元気だよ。

ちよび安。不安になって。お藤が三味線を弾く（BGM）

ちよび安

やっぱり、金魚鉢を取り返しに来たんだね。

源三郎

悪いがそういうことだ。

ちよび安

そうか、わかったよ。でもさ、お侍さん。もうちょっと待ってくれねえかな。

源三郎

待つ？

ちよび安

ああ、おいら、この金魚。このお美夜ちゃんの為に苦労して捕ったんだ。今この金魚を死な

すわけにはいかねえんだよ。

それはそうだ。

源三郎

いいよ、安ちゃん。

ちよび安

この金魚の模様が好きだと言ってたじゃねえか。

お美夜

でも……。

ちよび安

だからさあ、お侍さん。もうちょっと稼いで他の入れ物を手に入れるまで、これおいらに預

源三郎
ちよび安

けておいてくれねえかな。必ず返しに行くから。
かまわんよ。それまで、待ってるから。

ありがとう。お侍さん。

お美夜がペコリと頭を下げる。2人、金魚の入った「こけ猿の壺」を大事にかかえて行ってしまう。そこにお鉢子をお盆に乗せたお久。

お久
さあ、どうぞ。

ああ。

源三郎
お侍さん。やさしいんだね。

お久
いや、ちょっと欲がないだけだよ。

源三郎
欲？何か訳ありの壺かい？

お久
俺には関係のないことだ。

源三郎
そうかい。

どうだ。今度のお祭りに俺と金魚釣りでしねえか。

えっ？

おまえの好きな金魚を捕まえてやる。

源三郎

お久

お久微笑んで、だまってお酌をする。源三郎 うれしそうに、酌を受ける。月が2人を照らし出す。お藤の三味線の音が鳴り響く。

―暗転幕さがる―

その頃、丹下左膳は百万両の壺をもとめて彷徨い歩いていた。陰で声がする。

左膳の声

侍の声

左膳の声

「おい。その壺を置いていけ」

「なに、バカなことを申すな」

「そうか、それじゃあ頂くまでだ」

陰で戦っている音。事が済んで、のっそりと現れる左膳。いろんなところで壺を奪い取って来たのか体中に壺を吊るしている。

左膳

よおし、これだけ集まれば少しは生活の足しになるだろう。でも、ここまで集めたらもう少し欲がでるな。うん、百個ほど集めてみるか。

そこにうやうやしく壺をもつ侍がやってくる。

左膳

おい、その壺を置いていけ。

侍A

なに？バカなことを申すな。この壺は江戸に献上する大切な壺だ。誰がお前なんか。

左膳

そうか、それじゃあ頂くまでだ。

左膳、言うが早いか刀を抜いて襲いかかる。必至に抵抗する侍。しかし、左膳にはかなわな。壺を捨てて逃げていく。

侍A

おのれ、覚えておけよ。

左膳

はははは。そんなに覚えきれねえや。よしと、これで37個目だ。まだまだ、足りねえな。

左膳、遠くに壺を持つ一行を見付けたらしく。

左膳

おっ、いたいた。今度はまた大人数だな。これは期待できるぞ。おい！おまえらその壺を置いていけ。（左膳、うれしそうにハケて行く。陰で戦う音）

誰かの声

「うわあああああっ！」

左膳の声

「ははははは、壺はもらったぞお！」

虎之介

いてて。ちくしょう！なんだあいつは。

小太郎

せっかくガラスの金魚鉢を買ったのに。奪い取られてしまいました。無念。

虎之介

くそおお。あの金魚鉢と「こけ猿の壺」をまんまと交換しようと思ったのに。

小太郎

あにき、どうしましょう。もう、お金がありません。

虎之介

うううう、ならば奪い取るまで。小僧を泣かしてもかまわん。

小太郎

わかりました。

小さな甲賀衆もついて行く。

第二幕 オヨネの村

ちんどん屋

(トントントンと静かに入場)

「まあまあ、とんでもない男がいたものです。まったくこの男、壺が目当てなのか、人斬りが目当てなのか真意はまったくわかりません。無理やりちよび安の壺とガラスの金魚鉢を交換しよとしてた甲賀の忍びにはえらい迷惑。まあそれは良しとして。

ところ変ってここは諏訪湖の岸。もともと貧しい土地柄。先ほどの村の連中も何かまたやらかしたようです。さて、どんなことになりますやら。(トントントンと静かに退場)

―暗転幕上がる―

オヨネ

じゃあ、あんたたちが村にあった壺かき集めて持って行っちゃったのかい。

文吉

そうだよ、少しでも金になればと思ったんだ。

与作

俺はお寺の壺なんかいい値になるとおもったんだけどな。

オヨネ

で、いくらになったんだい。

勘太

五両もくれたよ。

文吉

すげえよなあ。

与作

おお。

オヨネ

何言っただい、あんた達が持って行った壺は少なくとも40両にはなるぞうだよ。

三人

うえっ！

勘太

大損じゃねえか。

文吉

くっそおお。騙されたんだ。

オヨネ

騙される方が悪いんだよ。

与作

まいったなあ。

オヨネ

それに比べてあの旦那は立派な壺をたくさん抱えていらっしやって、これを全部っつぱらって来いって、ほんとよだれが出るほどいい男っぶり。

文吉

あの旦那？

与作

左膳の旦那のことかい？

オヨネ

そうだよ。ほかに誰がいるんだい。

勘太

オヨネちゃん、まさか俺たちを差し置いて、左膳の旦那に惚れちまつてるなんてことはないよな。

オヨネ

あんたたちなんか差し置かなくてあたしは左膳の旦那にホの字だよ。

三人

そんなああああ。

オヨネ

さあ、旦那が起きるころだ。食事の支度をしなくちゃね。

文吉

俺たちも腹減ってんだけど。

オヨネ

そんなことは知らないよ。それより、早く和尚さんや庄屋さんのところに行って謝った方が身のためだよ。

オヨネ、ほほ笑みを兄弟たちに送る。

兄弟たち

ジーザス……。

兄弟たち、すっかりしよげ返って去っていく。

オヨネ

まったくしょうがない連中だよ。

村人去って行くと入替りに弥平が帰ってくる。懐からお守りを出して見つめている。

オヨネ

お帰りなさい。弥平じいさん。

弥平

今帰った。(あわててお守りを隠す)

オヨネ

どこに行ったの。

弥平

ああ、ちょっと気になることがあってな。

オヨネ

そう。

弥平

安坊、帰ってるかな。

オヨネ

まだ、姿は見ないけどね。弥平さん何かあったのかい？

弥平

……実は、安坊の親がわかったんだ。

オヨネ

えっ！よかったじゃないか。でっ、どこのどいつだった。

弥平

それが、とんでもない話しでな。

お美代

とんでもない？なんだいそれは。

弥平ため息をつきながら逆側のほったて小屋の中に入っていく。そこに高大之進、家来の世之介と右近を引き連れやってきた。

世之介

あのじじいです。

大之進

あやつが壺を持っておるのか。

右近

いえ、持っているのはガキの方です。ですが、壺はたぶんあの小屋に。

大之進

そうか。壺はわしらのものじゃ。

世之介

それでは、拙者があのじじいと話しを付けてまいります。

大之進

いろいろ申したら切ってもかまわん。

右近

はっ。

右近、弥平ではなくオヨネのほったて小屋にずかずかと入っていく。

右近

ごめん。

暫くして、右近が中からほうりだされる。

右近

わああああっ。

大之進

ううう。何事。

そこに丹下左膳がでてくる。

左膳 なんだ。人が昼寝をしているのに。うるせえ奴らだ。

大之進 きつ、貴様。おまえには用はない。壺じゃ。きのう小僧に渡した壺に用があるのじゃ。

左膳 小僧に渡した壺？ああ、ありや壺じゃねえ。金魚鉢だ。

オヨネ やいやい、人の家に勝手に入って来て、何て言い草だい。ちよび安の家はとなりだよ。

左膳 まったくだ。もう少しでいいところだったのに。人の恋路を邪魔すんじゃねえ。

左膳を見て動きを止める。弥平も物音で小屋から飛び出してくる。

オヨネ 弥平さん、あぶないよ。

弥平 壺っていうのはこれのことかい。

世之介 大之進さま！

大之進 うむ、「こけ猿の壺」に間違いない。

右近 その壺を返してもらおう。

右近、世之介刀を抜くと。左膳を囲む。

左膳 なるほど、その壺を血眼になって探していたという訳か。そうと聞いたら返せねえな。

左膳、刀の柄に手をかけると、皆身構える。

大之進

左膳

大之進

左膳

大之進

お主、そんな体で柳生一刀流の我らが倒せると思っているのか？
試してみるかい。

面白い、抜け！

お前らなんぞ、この「濡れ燕」を抜くまでもないわ。

こしやくな。

大之進が斬りかかる。左膳、刀の柄で大之進の胸を突き、うずくまった背中にさらに一撃、さらに刀を抜こうとしていた侍の喉下にサヤを突きつけ、睨みつける。

大之進

世之介

左膳

まあ、待て。ちょっとふざけただけだ。

なっ、なんだ、本気にならんでくれよ。

よし、とっとと帰れ。

大之進たち少し離れて。

大之進

左膳

右近

化けもん、ただじゃ済まさぬぞっ。

何を、この。

問答無用！

侍の一突きを交わす左膳。その一突きが弥平の体につき刺さる。

弥平

うっ。

オヨネ

弥平さん！

左膳の目が火のように燃え上がる。

左膳

てめえら、覚悟しな。

左膳が刀を抜き、大之進の頭巾かぶとが取れる。左膳に斬りかかる世之介と右近、一瞬にしてその2人を斬り、大之進を睨みつける左膳。左膳のあまりの強さにうろたえる大之進。

大之進

きつ、貴様、このワシを斬ろうというのか。

左膳

それがどうした。俺は斬りたい奴を斬る。

大之進

まっ、待て。お主ほどの腕なら土官どくわんの口もあるう。何ならわしが紹介するぞ。

左膳

人の仕事の心配より、てめえの命の心配でもしな。

左膳が一瞬動いたのを見るや、一目散いちもくさんに逃げ出す大之進。虫の息の弥平。

左膳
オヨネ

おい、大丈夫か？しっかり、
弥平さん。

瀕死の弥平。

弥平

安坊を頼みます。(懐からお守り袋を出す)

左膳

なんだこれ。

オヨネ

お守りだよ。

弥平

これは、安坊のお守り、これを見せれば親がわかります。

オヨネ

そうだ。おじいちゃん。安の親は誰だったの？

弥平

・・・頼みます。

左膳

おい、おやじ。しっかりしろ！頼むって言われてもお前・・・。

オヨネ

弥平さん、しっかりしなよ。ここにいる左膳の旦那がね。壺を売って弥平さんと安坊にやっ

てくれって、ねえ、聞いているのかい。弥平さん。(息絶える弥平)

オヨネ

弥平さん！

左膳

くそおおお、何てことしやがるんだい。

―幕― 休憩

第三場 龍神の舞

幕まえ。ちんどん屋がやってくる。

ちんどん屋

チンチンドンドン・チンドンドン。

「時は暫くたちまして、育ての親代わりの弥平を失ったちよび安。何しろ左膳もお藤に世話になつてる身分。何もできません。結局、お藤が引き取って育てておりました。それがまた、目の中に入れても痛くないというほどの可愛がりよう。ところがそこにオヨネとその他おまけまで転がり込んで来たのでさあ大変。今や笹屋は難民のキャンプ村です。

そして、お話はまったく以外な方向へと展開してまいります。さて、どんなことになりま
すか」チンチンドンドン・チンドンドン。

―幕が開く―

源三郎と左膳が戦っている。(殺陣)物すごい死闘だ。それが龍の舞いとリンクする。

(3分ほど) 龍神会 (白紗を使い効果を出す。音は激しい方がよい)

龍の舞いが終了すると、2人ともへたばって座り込む。

左膳

お主、なかなかやるなあ。

源三郎

お主こそ、その腕があれば道場でも開けるものを。

左膳

冗談じゃねえ。俺はこのままがいいんだ。

源三郎

ふざけたやつだ。

左膳

しかし、あの金魚鉢に百万両の宝の場所を塗り込んであるとはな。

源三郎

・・・まったく迷惑な話した。

左膳

お陰で安はひとりぼっちになった。

源三郎

・・・すまんことをした。

左膳

大金は人の心を狂わすんだよ。

源三郎

まさか、家来どもが、俺を裏切るとは・・・。

左膳

世の中なんてそんなもんだ。

思いつきり戦って、気が知れる2人。源三郎が話し始める。

―暗転幕下がる―

源三郎

なあ、左膳。諏訪湖に龍が住んでおるのを知ってるか。

左膳

さあな。

源三郎

昔、甲賀二郎という男がおった。美しい妻をめぐって幸せに暮らしていたのだが、嫉妬深い2人の兄に深い穴に突き落とされてな。

左膳

どこにでもいるんだ。そういうヤツが。

源三郎

2人の兄は残された美しい妻を我が物にしようと詰め寄ったが相手にもされず、妻は三郎を黄泉の国まで探しに行くのじゃ。

左膳

黄泉の国？えらいとこまで探しに行ったな。どんな国だ。

源三郎

地べたの下にある村だそうさ。

左膳

・・・無茶なことするな。

源三郎

その村にこれまた美しい女がおってな。

左膳

美しい女。そんなところに俺も行ったみたいものだ。

源三郎

それが諏訪湖に住む龍の仮の姿。

左膳

えっ、龍か。そりゃまずいな。

源三郎

三郎は浮世のことを忘れておったから、その女と結婚して子供ももつけたそうさ。

左膳

へえ。

源三郎

それでも9年たったある日。三郎は自分に愛する妻がいたことを思い出した。記憶をとりもどしたんだ。

左膳

昔の女が忘れられなかったのか。

源三郎

三郎は妻と子供に別れを告げ、再び浮世へと舞い戻った。

左膳

へえ、なかなか男気があるじゃねえか。

源三郎

ところが三郎は、浮世に戻った自分の姿を見ておどろいた。

左膳

なんで。

源三郎

自分が龍の姿になっていたんだ。

左膳

へえ、じゃあ俺と同じだ。化け物になって帰って来たということだ。

源三郎

三郎は嘆き。国中を彷徨さまよっていると、諏訪湖の方より、我が名を呼ぶものがある。

左膳

ほう。

源三郎

三郎を黄泉の国まで探しに行った妻が、なんと龍の姿で待っていたんだ。

左膳

へえ、いい話しじゃねえか。

源三郎

そして、この二頭の龍が、この諏訪湖を守る神となった。

左膳

なるほどね。

源之助

なあ、左膳。

左膳

なんだ。

源三郎

好きになった女と一緒に暮らすのは、いいもんだろうな。

左膳

江戸の女は違うのかい？

源三郎

違うな。ぜんぜん違う。

左膳

じゃあ、やめるこった。

源三郎

そんなことができれば苦労はしねえよ。

左膳

侍っていうのはかわいそうなものだな。まるで黄泉の国だ。

源三郎

まったくくだ。お前も少しは、お藤を大切にしろ。

左膳

浮世に舞い戻ったらそうするさ。

源三郎と左膳、少し笑いあう。

―暗転幕上がる―

笹屋。オヨネが竹馬を持ってやってくる。部屋の中にはお藤。少し離れたところに文吉・与作・勘太がちよこなんと座っている。

オヨネ

安坊はいないかい？

お藤

今、奥へいったけど。

左膳

ああ、大工の音吉に竹馬作ってもらったんだよ。

お藤

いけません。竹馬なんか安坊が怪我でもしたらどうするのよ。

オヨネ

近所の子供たちはみんな乗ってるけどね。

お藤

あんたは黙ってなよ。安坊は、ご近所の子供とは違って繊細なの。こんな野蛮な遊びはしま

せん。

オヨネ

男の子は体を鍛えなきゃダメだよ。

お藤

これからは、体よりも頭を鍛えなきゃダメなんです。

お藤とおヨネ、ものすごく睨みあう。ちよび安がやってきて。

ちよび安

どうしたの？

文吉

何でもないよ。

与作

奥へ行ってな。

勘太

怪我するぞ。

ちよび安

あっ、おいらその竹馬乗りたい！

オヨネ

ほらみな。

お藤

きいいいいい！

お藤、ジロジロと周りを眺めて。

お藤

いったいどうなってるんだい。あたしが預かるって言ったのは、ちよび安一人だったはずだよ。そこになんでアンタやいろんなもんがくっついて来るんだい。

オヨネ

しょうがないだろ。安とお美夜は兄弟みたいなもんだ。あたしゃ、お美夜の保護者だからね。

お藤

まったく！それで、あんたたちは何。

文吉

村を。

与作

追い出されて。

勘太

しまいました。

兄弟たち

どうか暫く養っておくんなさいまし。

ハチ

ワン！

お藤

犬までいるじゃないか！

全員

お願いいたします。

お藤

知るか！

ちよび安

おいら、お藤さんに竹馬教えてもらいたいなあ。

オヨネ

えっ！

お藤

あら、そうかい。しょうがないね。じゃあ庭にでも行こうか。ちよっとごめんよ。

オヨネ

痛て！何すんのさ！

お藤

おや、火鉢があるのかと思ったよ。

オヨネ

くやしいい。ちよっとあんたたち何とかいいなよ。

兄弟たち

いえ、俺たちは居候の身なんで。

ハチ

ワン！

オヨネ

ほんと役立たたずだね。

お藤とちよび安、外にでて。

お藤

さあ、安坊。竹馬しようね。

ちよび安

うん。

お藤

ほら、こうやってこうやって・・・うまくいじゃないか。

ちよび安

お藤さん。

お藤

なんだい。

ちよび安

百万両ってどの位？

お藤

ん？まあ、たくさんだねえ。江戸中の金魚を全部買ってもまだだいぶ余るくらいさ。

ちよび安

へえ、すごいんだね。じゃあ、もっといい金魚鉢を買えるんだな。

お藤

安坊、百万両もあつたらこのお藤さんが金魚鉢じゃなくてこんな池を買ってやるよ。

ちよび安

金魚鉢の方がいいや。池じゃ持ってあるけねえ。

お藤

そうか金魚鉢のがいいかい、ははははは。

ちよび安

百万両か。

お藤

どうしたんだい？

ちよび安

この金魚鉢が百万両なんだって。

お藤

えっ？誰が言ったの。

ちよび安

忍者みたいな格好したおじさんたち。

お藤

忍者？それで？

ちよび安

その壺をよこせていうから、これは壺じゃないよ。金魚鉢だよと教えてやった。

お藤

何かされなかったかい。

ちよび安

「そうですか」って肩を落として帰っていった。

お藤

なんだいそれは？

ちよび安

世の中には変わった人がいるんだね。

お藤

そうなんだよ。いっぱいいるんだよ。こわいね。

笹屋では、源三郎、お久を相手に酒を飲んでる。何と甲賀の2人も例の忍びの出で立ちで飲んでる。

お久

このままずっと壺が見つからないといいのにな。

源三郎

バカをいうな、百万両だぞ。

お久
源三郎

でも、壺が見つかったらもうここへは来られなくなるんでしょう？
うん。

お美夜がお銚子を運んでくる。

お美夜
源三郎
お美夜
お久
源三郎

はい、お待たせしました。
ありがとよ。お美夜ちゃん、お手伝いかい。
はい。

おかみさんがそれはそれは子たちを可愛がっているの。本当のお母さんみたい。
そうか。なんだかうらやましいな。

そこに何だかがっかりした左膳がやって来て。

左膳
源三郎
左膳
源三郎
お久

お藤のヤツどこに行ったんだ。ちよび安も姿がみえねえし。

ははは、2人で安のとりっくらか。お藤さんも、そろそろ自分の子供が欲しいんじゃないかな。

えっ？

へっ、鈍い野郎だぜ。

おいおい、どういうことだ。お藤がいったい誰の子をほしがってるってんだ。
源三郎さまは？

源三郎

お久

源三郎

お美夜

お久

へっ？

源三郎さまも子供が欲しくはありませんか？

いや、俺は……。その……。

2人とも、自分のこととなるとまるでダメですね。

ほんとだらしがないんだから。

お久とお美夜。ニコニコして台所へ。左膳、こけ猿の壺を持って。

源三郎

左膳

源三郎

左膳

源三郎

左膳

左膳、少し気になることがあるんだ。

なんだ急に。

ほら、弥平じいさんが残した安のお守り。

お守り？それがどうした。

俺は、安の親を知っているかも知れん。

何！ちよび安の？

そこにお藤がやってきて。

お藤

左膳

お藤

あんた、あの子かわいいこと言うんだよ。

どうしたんだ。

いやね。あたしのことおかあちゃんって呼んでもいいかって。まいっちゃうね。

大喜びしているお藤を、横目に見つめ合う左膳と源三郎。

虎之介　くそう。百万両の壺が、目の前にあるのにまったく手がだせない。

小太郎　あにき、俺たちもしかしたらバレバシなんじゃないですか？

虎之介　そんなことあるものか。俺たちは忍びだぞ。

小太郎　はあ、そうなんですが。

そのとき、どこからともなく矢が飛んできて、小太郎のおでこに思いっきり刺さる。ザク！

小太郎　あれ？

虎之介　あはははは、お前のおでこに矢がささっているぞ。

小太郎おでこから矢を抜いて。スポツ！

小太郎　ああ、死ぬかと思った。

にわかに周りで叫びの声「キャー」。左膳、その矢に手紙が付いているのを見て。

左膳　おい、それは矢文だ。ちょっとみせる。

左膳、源三郎と手紙を読む。

左膳
源三郎
なに？「お主たちの大切なものを預かった。取り戻したければ、『よだれっくり』まで来い」
まさか。

奥からオヨネがあわててやって来る。

オヨネ
犬
大変だよ。頭巾をかぶったお侍が沢山来て、ちよび安とお久を連れて行っちゃったよ。

ワン！

なんだと！

お久！

お藤、半狂乱。左膳と源三郎。走って去る。その後を追うお藤。それを見送るオヨネと兄弟
たち。

文吉
おい、まずいぞ。

オヨネ
何が？

与作
あそこは立ち入り禁止区域だよ。

勘太
すぐ上の方に、この前の大雨で溜まった、でかい水たまりがあるんだ。

オヨネ

えっ！

文吉

あれが崩れたらひとたまりもねえ。みんな鉄砲水に押し流されて死んじまうぞ。

オヨネ

罨だよ。左膳の旦那！

オヨネ血櫃をかいて走っていく。

文吉

オヨネちゃん、だめだ。

三人見つめ合って。

勘太

行くか。

文吉・与作

おお！

後に残された甲賀の2人。おろおろしながら。

小太郎

あにき、チャンスです。

虎之介

うむ。

意を決して、甲賀2が壺をつかみ走り去ろうとする。ところがそこに徳川の刺客、蒲生泰軒が現れて。

泰軒

待て！

虎之介

だっ誰だ。

泰軒

その壺は拙者がいただく。

虎之介

そこをどけ。俺たち急いでるんだ。

泰軒

そうは行かぬ。まず、その壺を置いていけ。

虎之介

なんだと！

泰軒、目にも止まらぬ早さで、虎之介を袈裟懸けに切る。(切られる)

虎之介

・・・。

小太郎

あにき！

虎之介、倒れる。

小太郎

あにきいいいいい！

泰軒

さあ、壺をよこせ。

小太郎、そろそろと泰軒に壺を渡す。

泰軒
小太郎 あはははは。とうとう我が手にはいったか「こけ猿の壺」よ。
あんたいったい何者だ。

戦闘モードで小太郎が身構えている。

小太郎 誰に頼まれた。

泰軒、不敵な笑みを浮かべ。

泰軒 徳川吉宗さまだ。

小太郎 何だと！

泰軒 この壺は貰った。

泰軒、壺を片手に行こうとして。

泰軒 ああ、言い忘れていた。今のは峰打ちだ。 (去る)

虎之介 ああああ、びっくりしたああ。

小太郎 あにきいいいいっ！

虎之介立ち上がり。

虎之介 ばかやろう！何をもたもたしているんだ。壺を逃がすな。

小太郎 はい！

—黒紗幕下がる—

第四幕 よだれつくりの原 黒紗幕奥（透かし）

源三郎

誰もおらんではないか。

左膳

だから言っただろう。これは罠だ。

源三郎

くそおお。お久をどこへ連れていったんだ。

左膳

なあ。源三郎。

源三郎

なんだ。

左膳

お主。お久をどうする気だ。

源三郎

なに？

左膳

女を好きなだけもてあそんで、飽きたら紙くずのように捨てるわけか。

源三郎

きさま、拙者を愚老いたすか。

左膳

本当のことを言ったまで。

源三郎

なんだと。

左膳

おめえがもっとしっかりしてりゃあ、何もこんなことにはならなかったんだ。

源三郎

俺が？

左膳

ああ、政治のいい道具にされやがって。

2人、すっと離れて。

源三郎

化け物が、その体で俺に勝てると思っているのか。

左膳
源三郎

今度こそ決着をつける。
望むところ。

言うが早いか、左膳と源三郎。刀を抜き火花を散らせていた。驚いたのは高大之進。人質を捕らえて高見の見物が意外な展開。身を乗り出して驚いた。(紗幕前)

大之進

あいつらは何をやっているんだ。人質がここに居るというのに、いさかいを始めおった。

侍どもに捕らえられたお久とちよび安が大騒ぎ。

お久

源之助さま、あたしのはほっとしてお逃げください。これは畏でございます。

ちよび安

片目のおじちゃん。そんなことやってる場合じゃないよ。早く逃げないと鉄砲水が来るよ。

大之進

バカに付ける薬はないわ。

そこに、先程の泰軒。大之進の前に現れる。

大之進

おお、蒲生泰軒どの。もうお帰りですか。

泰軒

首尾は上々。「こけ猿の壺」はこちらの手に入った。

大之進

さすがは蒲生どの。それでは計画通り、奴らを水攻めにいたしましょう。

泰軒

もう少し頭のいい奴らかと思っていたが残念じゃ。好きにせい。

大之進
家来ども

ははあ。おい。水がめをぶちまける！
はっ。

相変わらず戦っている2人。誰も手がつけられない。その時、家来が高台の土手を崩すと大きな水口が広がり大水が水煙とともにあふれ出す。ゴゴゴゴゴゴッーっ！

大之進

ははははは、あの世で悔やむがいいわ、源三郎！

お久

源三郎さま！

ちよび安

片目のおじちゃん！

大きな水たまりから溢れでた水が洪水のように押し寄せる。ゴゴゴゴゴゴオオッ！
左膳と源三郎、それに気がついて。

左膳

あれはなんだ。

源三郎

水だ。

左膳

いや、あれは鉄砲水だ。

暗転。ゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオッ！

しばらくして、大之進が高見から下を恐る恐る見下ろすと。辺りはまるで大きな河のよう。――

―黒紗幕上がる―

大之進 ははははは、天下に轟いた「伊賀の暴れん坊」もこれで最後。

お久 源三郎さま！

ちよび安 やだよおお。片目のおじちゃん。死んじややだああ。

泰軒 これではどんな剣豪もひとたまりもない。あっけないものじゃ。

大之進 さて、蒲生どの、これからどのようにいたせばよいでありますか。

泰軒 わしの家来に、あの家に住まう連中の口を封じるよう命じてある。

大之進 なるほど、この壺を闇に葬るわけですか。

泰軒 後は、この人質の口を封じれば、「こけ猿の壺」のことは闇から闇へ。

大之進 おい、人質を連れてまいれ。

侍ども ははっ。

目隠しをされ、連れてこられるお久とちよび安。大之進の前にひざまずかせて。

大之進 残念だったな。もう、お前達を助けに来るものは誰もおらん。

お久 ちくしょう！地獄で呪ってやる！

ちよび安 ねえちゃあん。

お久 泣くんじゃないよ。安坊、泣いたら負けだからね。

ちよび安 だって。

お久
ちよび安

大丈夫、ねえちゃんがそばにいるから。男の子だろ。
うん。

大之進の家来。刀を抜き大振りの構え。

大之進
春道

やれ！
はっ。

そのとき、天からあざ笑うような声が響き渡る。

声

へっ、だから侍のやることは気にいらねえって言ってるんだよ。

大之進

むっ。何ヤツ！

大之進と泰軒のいるところから、さらに高台に2人の陰が現れた。

左膳

地獄のそこからよみがえって来たぜ。

大之進、腰を抜かすほど驚いて。

大之進

源三郎

泰軒

侍たち

きさまら、生きておったのか！

大之進、きさまもこれまでだ。

えええい、こしやくな。皆の者、かかれ！

おお！

左膳と源三郎、火のように燃えて。

源三郎

左膳

俺たちを、地獄から舞い戻ったただの暴れん坊だと思ったら大間違いだ。

ああ、さしずめ、牙をむいた二頭の龍だ。覚悟しな。

大殺陣まわりが始まる。エキストラでもいいので、沢山の侍をよういしてください。左膳と源三郎は切って切って切りまくる。阿鼻叫喚、そこはまるで地獄のよう。

お藤とオヨネ、ひざまずいているお久とちよび安を救助。役立たずの三兄弟も棍棒を持って大立ち回り。入替り立ち替わりの大スペクタクルだ。

2人の余りのすごさ。それはそつだ。柳生一刀流の達人とこれまた名刀「濡れ燕」を操る達人がタックを組んで相手となればかなうものはない。あつと言う間に泰軒と大之進がとりのこされた。

―暗転幕ダウン―

泰軒

大之進どの。だいぶ話しが違うのう。

大之進

蒲生どの。なぜ取り巻きの兵士を使わぬ。

泰軒

我らはこの「こけ猿の壺」を奪うがための精銳部隊。この壺がこの手にある以上手出しは致さぬ。

大之進

うとうう、謀ったな。

泰軒

地方の藩のいさかいに徳川は手を下さぬまで。さすれば、ここから立ち去らせて頂く。まで。

大之進

泰軒、近くの侍にひとこと。

泰軒

我らは引くぞ。

作造

はっ。

泰軒

大之進どの。この壺はいただいて置く。悪く思わんでくれ。

蒲生泰軒。侍と一緒にハケる。

大之進

待ってくれ、泰軒どの。

源三郎やってきて大之進と対峙。左膳はそれを邪魔する侍どもを切る。

源三郎
大之進

年貢の納め時だ。大之進。
もやはこれまで。

2人の殺陣。激しく続く。さすが柳生一刀流、免許皆伝の大之進。なかなか強い。ところがこそくにも源三郎に砂をまき目をつぶす。源三郎の目がくらんだスキにナデ切るうとした大之進を左膳が目にも止まらぬ早さで切り裂く。モンドリ打って果てる大之進。戦いは終わった。

そこに人質になったお久とちよび安。お藤、オヨネ、三兄弟に見守られて。

お久
ちよび安

源三郎さま！
片目のおじちゃん！

ひしと抱き合う、二組。

源三郎
お久

お久。怖い目にあわせちまったなあ。許せ。
源三郎さま。

お藤がちよび安に抱きつく。

お藤 安。大丈夫かい。どこも怪我をしてないかい。

ちよび安 うん。大丈夫だよ。

左膳 おいおい、少しは俺のことも心配してくれよ。

お藤 ばか！あんたが死ぬもんか。

左膳 はははは、それでこそお藤だ。

それを見ていたオヨネ。目は涙で一杯だ。どんな涙かわからないけど。

オヨネ さあ、万事うまくいったところで。祭だよ。どんなに辛いことがあったって、祭が人を活か

すんだ。さあさあ、うじうじしてるヤツや置いてっちまうよ。気合いを入れてフンドシを締めしな。

三兄弟 おお、祭だ祭だ。派手にやらかそうじゃねえか。

暗転幕が上がると、太鼓が沢山並んでいる。ここは御諏訪太鼓の見せ場。どどくとぶちかましてください。そこに龍も現れて大暴れ。祭は最高潮に達する。MYプロジェクトも踊り出す。役者さんも踊り出す。もつめちゃくちゃだ。

5分ほど盛り上がったらす居にもどります。黒紗幕ダウン。紗幕奥は見えません。静かにカーテンコールを待ってください。

エピソード

紗幕前。下手に甲賀の忍者に囲まれちよび安が籠に乗ろうとしている。上手から源三郎、左膳、お藤はしぶしぶとついてくるがちよび安との別れがたく、怒っている。源三郎は壺を抱えている。

お藤 だから最初からごどもなんか預かるの嫌だって言ったんだよ。

左膳 そういうな。よかったじゃねえか。本当の親がみつかったんだから。二万三千石だったって立派な殿様だ。安坊も俺たちに育てられるよりよっぽど幸せだ。

お藤 あたしやだよ。何だい、お守り袋ひとつで実の子かどうかなんてわかるもんかい。

源三郎 ……我が兄上の柳生対馬守が江戸の参勤でこの下諏訪宿に宿泊した。そのとき兄上と恋に落ちて、後に侍女は兄上の子、安坊を産み落とした。その事実を知った兄上は、内密に子供の搜索を命じていたそうだ。
お藤 勝手なもんだねお侍ってやつは。

左膳 ……お藤。

おろおろする左膳を尻目に源三郎は壺を持って甲賀忍者の方へ。

源三郎 この壺は甲賀に返す。だから、若殿をしっかりと警護してくれ。

甲賀2人 壺？百万両の壺は奪い取られたのでは……おおまさにこの壺は！ありがたき幸せ。若殿を命にかけて守ります。

源三郎、左膳を見る。

源三郎

あいつのお陰だ。

左膳

弥平が殺されと時、壺をすり替えた。それが本物の壺だ。

虎之助

すり替えた。どうして？

左膳

百万両の壺だぞ。普通、そうする。

小太郎

やるねえ！さすがだ。

お久、上手から。すねているお藤を通り過ぎて源三郎の所へ。

源三郎

俺はお久を連れて伊賀に戻る。もう、江戸には行かん。

左膳

ほほう、そうかい。そりゃいい。お前は江戸には似合わん。

お久

（源三郎の見て、思い出したようにお藤のそばへ）女将さん。お世話になりました。

お藤

あの、暴れん坊の手綱をすっかりつかんでるんだよ。

お久

はい。

源三郎

さらばだ、左膳。

左膳

ああ。

源三郎、お久下手へ。すると行列が動き始める。

お藤
左膳
（たまらず、籠を追いかける。）安。安坊！達者で暮らすんだよ。
（左膳左膳、を引き止め首を振る。）安！いい殿様になるんだぞ。

お美夜久下手から飛び出してくる。

お美夜
安ちゃん！

行列が止まる。

ちよび安
お美夜ちゃん。

お美夜
はい。

ちよび安
父ちゃんと母ちゃんをよろしくな。

左膳
おい、今なんて言いやがった？

お藤
安坊！

左膳
お美夜
バカ野郎。こっちの心配してやがらあ……。
げんきでねえ。

左膳
安坊。

ちよび安
左膳

なんだい。
金魚には気をつけろよ。

左膳、金魚の入ったガラスの鉢をちよび安に渡す。ちよび安、泣き笑。お藤我慢できずちよび安を抱きしめる。左膳、お藤の肩を抱いてちよび安から離そうとする。お藤も諦めて離れる。行列はしずしずと去って行く。それを見送くる二人。

お藤
左膳
お藤

(涙をふきながら) 柄にもないね。あーあ、せいせいした。子どもなんてたくさんさ。これでのんびり暮らせるよ。

左膳
お藤
左膳

ふん、やせ我慢しやがって。
それはそうと、あの鉄砲水からどうやって助かったんだい。
おお、あの時な。『よだれっくり』に着いた時に、えらい殺気を感じてな。大之進の部下くらいなら俺と源三郎で十分倒せると思ったが、ありゃ半端じゃねえ数だった。多分徳川の手だな。

お藤
左膳

それで、どうして二人で喧嘩を始めたんだい。
ああ、源三郎も気づいていやがった。二人で喧嘩して、こっちを襲つきっかけをはずしてやった。

お藤
左膳

ほんと、あんたたちや似たもの同士だねえ。
へん、あんなやつと一緒にするな。で、そこまでは良かったがあの鉄砲水だ。二人して飲み

お藤

込まれ、もうだめだと観念しちゃった。

よく、助かったね。

左膳

いや、多分死んだんだと思う。暗い黄泉の国へ落ちていく感じだった。

お藤

馬鹿言うんじゃないよ。ちゃんと生きてるじゃないか。

左膳

その暗闇の中で声がしたんだ。

源三郎とお久、橋の上に現れる。白い龍がそっと上手上空に登場。舞台下手には龍神会の龍が動いている。

お久

声？

源三郎

ああ、俺の名前を呼ぶ声だ。

源三郎・左膳

ありゃ、確かにお前の声だった。

お藤・お久

私の声……。

源三郎

それで声のする方を見上げたら、光の中に白い龍が飛んでいた。

左膳

気がつけば、俺の体も龍に変わっててな。

源三郎

声のする方へぐんぐん昇って行ったんだ。

左膳

そしたら、地上に出ていた……あれは諏訪の龍神なのかも知れねえな。

源三郎、白い龍を見ながらそっとお久の肩を抱いている。

左膳

お藤

左膳

お藤

左膳

お藤

お藤。甲賀三郎って知ってるか？

そんな人は知らないよ。

そうか。

で、その甲賀・・・何とかがどうしたって。

いや、別に。ただ、好きになった女と、その子供と暮らすのもいいかなって。

何それ、似合わない台詞せりふ。

お藤、少し笑ってからやがて、目を丸くして驚く。

えっそれってまさか。

・・・

ねえ、それってまさか。

おっ、いけね、そっぴやあ酒が切れていた。

えっ？

ちよっくら行って来る。

・・・。

行こうとする左膳に後ろから抱きつくお藤。

左膳

見てみなよお藤。まるで空から小判でも降って来そうな、いいお天気じゃあねえか。

拍子木。

―幕―

黒紗幕飛んで、全員でカーテンコール。お疲れさまでした。

2006.9.24 GEKIDAN J☆BOX Chifuyu Kobayashi